

# 釈尊を慕う仏弟子たちの言葉

— 慈 悲 —

藤 村 隆 淳

(高野山大学)

慈悲行の実践者であったブッダ釈尊の利他の行動、特に「慈」と「悲」とをキーワードとして、仏弟子達が語る釈尊への思いと言葉、仏陀釈尊の他者への慈悲の言行等を、古層の初期仏典（例えば、『スッタニパータ』・『ダンマパダ』・『テーラ・テーリー・ガター』等）を中心として抽出し、初期仏教における「慈悲行」の一面に関して一考してみたい。

成道後45年間に及ぶ釈尊の説法・教化の行動は、比丘をはじめとする出家弟子、在家信者等に対する慈悲行の実践そのものであった。他者に向けられた飽くことのない慈悲行が世間と衆生との利益と安楽とに向けられていたが、その事を象徴的に表す釈尊の言葉を三つ採り挙げる。一は「説法・伝道遊行の開始の言葉」で、「『多くの人々の利益と安楽のために遊行せよ。一つの道を二人して行くことなかれ。』(caratha cārikaṃ bahujana-hitāya bahujanasukhāya. mā ekena dve agametta.)」<sup>(1)</sup>である。二は入滅直前の釈尊に対する「アーナンダの後悔」として述べられる「世尊よ。世尊は寿命のある限り〔この世に〕留まってください。善逝は寿命のある限り〔この世に〕留まってください。多くの人々の利益のために、多くの人々の安楽のために、世間の人々を憐愍するために、神々と人々との利益と安楽のために。」<sup>(2)</sup>(tiṭṭhatu bhante bhagavā kammaṃ, tiṭṭhatu sugato kammaṃ, bahujanahitāya bahujanasukhāya lokānukampāya atthāya hitāya sukhāya

devamanussāṇaṃ)」である。<sup>(3)</sup>この文句は、釈尊の入滅直前にマーラが出現して入滅を急がせる場面で、アーナンダは心がマーラに取り憑かれていたから、このように懇願することに気が付かなかった。今一つは、釈尊の「三ヶ月後の入滅の宣言」に見られる。「比丘達よ。ここで私は法を知って説示したが、汝達はそれをよく把持して、実践し、修習し、多く修しなさい。そうすることで、長時に亘って梵行が続き、それが久住するように。その事が多くの人々の利益のために、多くの人々の安楽のために、世間の人々を憐愍するために、神々と人々との利益と安楽のために。」<sup>(4)</sup>である。

「慈」と「悲」の言葉として、mettā (慈)・karuṇā (悲)・anukampā (憐愍・慈悲)を主に、(1) ブッダ釈尊の呼称として(2) 他者への慈悲の実践(3) ブッダ釈尊による仏弟子への慈悲(4) 仏弟子達の慈悲の実践(5) ブッダ釈尊の説法と慈悲行(6) ブッダ釈尊の誕生に分け、上記の如き古層のパーリ聖典を中心に抽出する。<sup>(5)</sup>

## (1) ブッダ釈尊の呼称として

釈尊のことを「激流を超えた(渡った)方」と言う表現はしばしば見られるが、同時に「この人々をも渡らせた[お方](tiṇṇo tāres' imaṃ pajam)」(Sn. 545偈・571偈)と言う表現には利他が窺われ、Sn. 684偈に「あらゆる者たちの中の最上であり、最高の人物、あらゆる生きものの中の最上である、牛王のような人」と呼称する「最高の人物」(aggapuggala)を、註釈は「[自分と他者との]両方の利益の為に実践する人」<sup>(6)</sup>と注している。次に、Thera-g. では、仏陀釈尊をして以下の如き呼称で以て表している。

「あたかも暗夜に点された火の如くやって来た人々の疑いを除き、光明を与え、眼を与える者。(ālokaḍā cakkhudaḍā bhavanti ye āgatānaḡ vinayanti kaḡkhaḡti)」(3偈 Kāḡkhārevata 長老)、「最高の利益・慈悲を与える人 (paramahitānukaḡpin)」(109偈 Saḡgharakkhita 長老)、「自と他との両者の利益をなす者 (ubhinnaḡ atthaḡ carati attano ca parassa ca)」(443偈 Brahmaḍatta 長老)、「悪を犯さない。慈愛と不傷害と、これら二つはナーガの両足である。(avihiḡsā ca pādā nāgassa te duve)」(693偈 Udāyin 長老)、「全智者・全見者・勝者〔であるブツダ〕は、わたしの先生である。かれは大悲愍者 (mahākāruḡika)・あらゆる世間の医者・師である。」(722偈 Adhimutta 長老)、「神々と人間との師であり、慈しみを垂れる偉大な仙人であるブツダ (buddho ca kho kāruḡiko mahesi yo satthā lokassa sadevakassa)」(870偈 Aḡgulimāla 長老)、「結縛を破った慈悲深い偉大な聖者〔ブツダ〕 (saḡḡoḡjanabandhanacchidaḡ saḡsevase kāruḡikaḡ mahāmuniaḡ)」(1143偈 Tālapuḡa 長老)

## (2) 他者への慈悲の実践

出家比丘は、他者への慈悲の実践のために、「あらゆるものを味方とし、あらゆるものを友人とし、あらゆる生類の慈愛者 (sabbabhūtānukaḡpaḡka) である〔わたしは〕、つねに、怒らぬことを楽しみ、慈心 (mettācitta) を修習」(Thera-g. 648偈 Revata 長老)し、「無量〔の慈しみの〕心を修めて日夜常に怠ることなく、あらゆる方位に無量〔の慈しみの〕心を遍満する」(Sn. 507偈<sup>(7)</sup>)のである。そしてその実践は、例えば一人の愛しい子供に対する母親の如く、「人はいたるところで、あらゆる生きものに対して、善き人であるべきである。」(Thera-g. 33偈 Sopāka 長老)、「あら

ゆる生けるものに対して、はかり知れない〔慈しみの〕意を起こすがよい。」(Sn. 149偈)と述べる。<sup>(8)</sup>「カッサパよ。比丘にして瞋なく、恚なき慈悲の心を修習し (averam avyāpajjhaṃ metta-cittaṃ bhāveti), さらに、漏尽によって無漏の心解脱・慧解脱を現在に自ら識り、証し、到達して住す時、彼は実に沙門なり、バラモンなりと称せられるべし。」<sup>(9)</sup>

そして、他者に対する慈悲の実践の心構えとして、「盗んではならない。嘘をついてはならない。もろもろの弱いもの強いものに慈しみ (mettā) をもって接するがよい。」(Sn. 967偈), 「〔人の〕ためになること, 教法, 自制, 清らかな行いを思い続け, かつ実行するがよい。」(Sn. 326偈), 「すべての生けるものよ, 耳を傾けるがよい。人間の類に慈しみ (mettā) を垂れるがよい。」<sup>(10)</sup> (Sn. 223偈)そして、「あらゆる世の中において、はかり知れない慈しみの意 (mettañ.....mānasam) を起こすがよい。上方にも下方にもまた横にも障りなく怨みなく敵意なく、立っていても歩きながらも、坐りながらも、横になっても、人は眠らない限りは、この〔慈しみの〕念いをしっかりと保つがよい。」と述べ、これが「崇高な境地」(brahman .....vihāraṃ, 漢訳「梵住」)であると説く。<sup>(11)</sup> (Sn. 150~151偈)

他にニカーヤでも、「比丘たちよ。〔他者の〕饒益を欲し (atthakāma), 〔他者の〕利益を欲し (hitakāma), 〔他者の〕安穩を欲する (yogakkhemakāma) 人とは、実に如来・アラカン・正等覚者のことである。」<sup>(12)</sup>と述べる。また、釈尊は比丘たちに五の語り方 (pañca-vacanapatha) があることを示し、「慈心 (mettacitta) と瞋心 (dosantara)」が第五番であると述べ、「『我々の心は変わらない。我々は悪語を発しない。我々は〔他者に対する〕利益・憐愍心, 慈心に住し, 瞋心を〔抱かない〕。そして, その人を慈と共なる心を満たして住しよう。そのことをはじめとして, 一切世間を慈と共なる広大・高大・無量・無怨・無害の心を満たして住しよう。』と、

比丘等よ。このように汝達は学ぶべきである。<sup>(13)</sup>」と言う。さらに、他者に対する説法として、「法の善法性 (dhammasudhamnta) なる理由で、他に法を説く。悲愍 (karuṇṇa) によって、憐愍 (anuddayā) によって、慈悲 (anukampā) に執受して、他に法を説く。」と述べて、これが比丘の淨説法 (parisuddhā dhammadesana) である。<sup>(14)</sup>、「私は利益のために語るのであり、無利益のために〔語るのではない。〕私は慈心 (mettacitta) を以て語るのであり、瞋を懐きて〔語る〕のではない。」<sup>(15)</sup>と述べる。

### (3) ブッダ釈尊による仏弟子への慈悲

仏弟子が自らの出家・受戒に関する釈尊への讃歎として、「聖者〔ブッダ〕はわたしたちを慈しみたもうが故に (anukampāya), わたしたちを出家させた。〔今や〕わたしたちは、あらゆる束縛の滅尽というこの利益に達したからである。」(Thera-g. 176偈・Bharata 長老)、「聖なる戒めをもって、あなたは私を教誡し、私を慈しみ (anukampin), 摂取したもうた。あなたの教えは空しくなかった。〔いまや〕私は教えを受けて、弟子となっている。」(Thera-g. 334偈・Sumana 長老)、「そこで、あわれみ深い師 (kāruṇika), あらゆる世間の慈愛者 (sabbalokānukampaka) は、『来なさい、修行者よ』と、私に告げた。これが私の受戒であった。」(Thera-g. 625偈・Sunita 長老) 等がある。そして、ブッダ釈尊に対して、「私は悪魔の網にかからず、安楽に臥し、立ち、安楽に生活を営む。ああ、私は師の慈しみ (satthānukampita) を蒙っている者である。」(Thera-g. 888偈・Aṅgulimāla 長老)、「かのゴータマ〔ブッダ〕は、慈しみ (anukampā) を垂れて、私のために真理の教えを説きました。」(Thera-g. 136偈・Vāsiṭṭhā 長老尼), アーナンダ長老もまた「私はまだなすべきことのある身であり、

学習する者であり、まだ心の調熟しない者であった。それなのに私共を慈しみたもうた (anukampaka) 師」(Thera-g. 1045偈・Aṅgulimāla 長老) と述べ、「ブッダの説示されたとおりに、慈無量心がよく修習され (mettañca abhijānāmi appamāṇaṃ), 次第に積み上げられたことを、私は思い起こす。」(Thera-g. 647偈・Revata 長老) の如く述懐し、ブッダの教えは「[人々を安らぎの境地に] 導き, [さとの彼岸に] 渡し, (略) [人々を] 安らぎ (nibbuti) の境地に到達させた。」(Thera-g. 418偈・Migajāla 長老) のである。アーナンダはブッダ積尊に仕えた事を述懐して、「二十五年間の間、私は慈愛 (mettā) に溢れた身体の行いによって、……慈愛に溢れた言葉の行いによって、……慈愛に溢れたところの行いによって、尊き師のそばに仕えた。あたかも、[形を] 離れない影のようであった。」(paṇṇavisativassāni bhagavantam upaṭṭhahim, mettena kāyakammena mettena vacikammena-mettena manokammena chāyā va anapāyini.) (Thera-g. 1041~1043偈)

#### (4) 仏弟子達の慈悲の実践

仏弟子達は一般的に慈悲の実践について、「慈しみの心を以てあらゆる生き物を憐れむ者 (mettēna cittaena sabbapāṇ'ānukampati), このような人は多くの幸福を積む。」(Thera-g. 238偈・Vāraṇa 長老), 「慈しみの心 (mettā-citta) あり, あわれみ深く (kāruṇika), 戒行において自らよく調べ、精励努力して、常に果敢に、勇猛堅固であれ。」(Thera-g. 979偈・Phussa 長老), 「あらゆる生きとし生けるものは安楽で、平安で、自ら喜べる者であれ。(sukhino vā khemino hontu, sabbe sattā bhavantu sukhitattā)」(Sn. 145偈) と述べ、<sup>(16)</sup> 「この世でもろもろの生きものを殺害し、生

きものに対して憐れみがない者 (pāṇe dayā n' atthi)」をして「賤しい者と知るがよい」と教える (Sn. 117偈)。また、『ミリンダパンハ』には、サーリプッタの言葉に言及して、「それ故に、己の友にも敵に対しても、慈しみ (mettā) を起こすべし。慈しみの心 (mettacitta) を以て遍満すべし。」と、ナーガセーナはこれが「悟った人の教えである」と記す。<sup>(17)</sup>

### (5) ブッダ釈尊の説法と慈悲行

ブッダの説法が「慈悲行」そのものであると指摘する。まず、「四聖諦」に関して、「四つの聖なる真実は、生類を憐れむために、〔目覚めた人によって〕説かれた。〔それは〕苦と〔苦の〕集合と道と苦の壊滅と言う滅である。(cattāri ariyasaccāni anukampāya pāṇiṇaṃ, dukkhaṃ samudayo maggo nirodho dukkhasaṃkhayo.)」(Thera-g. 492偈 Sarabhaṅga 長老)、「眼ある人、太陽の末裔であるブッダは、生ける者達に慈しみを施すために、四つの聖なる真実をよく説示された。(sudesitā cakkhumatā buddhe-nādiccabandhunā, cattāri ariyasaccāni anukampāya pāṇiṇaṃ.)」(Thera-g. 1258偈 Aṅgisa 長老)と述べ、更に仏弟子達は「ゴータマ〔・ブッダ〕は、慈しみを垂れて、私のために真理の教えを説きました。(me dhammam adesesi anukampāya Gotamo)」(Therī-g. 136偈 Vāsiṭṭhā 長老尼)、「かの眼ある人は、慈しみを垂れて (anukampāya)、私のために真理の教えを説示された。」(Therī-g. 148偈 Sujātā 長老尼)、「かのゴータマ〔ブッダ〕は、慈しみを垂れて (anukampāya)、私のために真理の教えを説示された。」(Therī-g. 155偈 Anopamā 長老尼)、「アーンダに問うた。」「私は貪欲のために焼かれ、私の心は燃焼されている。ゴータマよ。さあ、慈しみを以て (anukampāya)〔これを〕消す法を述べてください。」(Thera-g. 1223偈

Vaṅgisa 長老), 「この覚者 (=ブッダ) はミティラーの都の辺について, 「人々の」あらゆる苦しみの束縛を捨てる為に, 人々に真理の教えを説示されたのです。」(Therī-g. 317偈 Vāseṭṭhi 長老尼), 「梵天 [のようなお方] よ。あなたは [わたくしを] 憐れみ (karuṇāyamāna), 遠く離れる教法を教えてください。」(Sn. 1065偈), 「あなたは覚ってから人びと (=衆生) を憐れみつつ (anukampamāna), すべて智慧と教法とを明らかにされます。<sup>(18)</sup>」(Sn. 378偈), 「多くの神がみ, 人びとは, 幸福を願いながら, さまざまな幸せを思い念じています。最上の幸せ (maṅgalam uttamaṃ) をお説き下さい。」<sup>(19)</sup> (Sn. 258偈), 「[目覚めた者は] 安らかなる心 (=涅槃) にいざなう勝れた教法を最上の利益のため (paramaṃhitāya) に説き示したもうた。<sup>(20)</sup>」(Sn. 233偈) と述べ, 「慈愛を以て住し (mettāvihāra), ブッダの教えを信じる比丘は, (略) 行が寂滅した安楽 (sukha) に到達するであろう。」(Dhp. 368偈) と教示する。

## (6) ブッダ釈尊の誕生

釈尊の誕生については, 「実に, 完全な人格者 [ブッダ] たちは [彼等の] 教えを実践する多くの男女の利益 (attha) のために, [この世に] 出現したもうた。」(Therī-g. 1256偈 Vaṅgisa 長老) のであり, 「マヤー [夫人] がゴータマ [ブッダ] を産んだのは, 実に多くの人々のためであった。[ブッダは] 病と死とに撃たれた人々のために, その苦しみのかたまりを取り除かれた。」(Therī-g. 162偈 Mahāpajāpati Gotamī 長老尼), 「他に比べるものがなく, 勝れた宝のようなかの菩薩は, [人びとの] 利益と安楽のために (hitasukhatāya), 人の世にお生まれになりました。釈迦族の村にあるルンビニー地方に [お生まれになりました]。』」(Sn. 683偈)。

「この童子は、最高の全き覚（＝等覚）を実現するでしょう。このお方は最上の清らかなものを見、多くの人びとのためになり、〔人びとを〕憐れんで、教法の輪を転ずるでしょう。（sambodhiyaggaṃ phusissat' āyaṃ kumāro, sodhammacakkaṃ paramavisuddhadassī, vattessat' āyaṃ bahujana-hitānukampi, vitthārik' assa bhavissati brahmacariyaṃ.）」（*Sn.* 693偈）と予言する。この一偈は「利他行の実践者」としてのブッダ釈尊の誕生を伝承する原形の具体例である。

#### 注

- (1) *SN.* 4-5, vol. I. p. 105. *Vinaya-piṭaka* PTS. vol. I. p. 20, 『根本説一切有部毘奈耶破僧事』大正24, p. 130. 他に、『四分律』・『五分律』・『大本経』（『長阿含経』1）等にも比丘達の伝道に関して、「二人して行く勿れ」の句はあるが、「衆生の利益・安楽」等の文は何れにも見られない。更に、後世の仏伝聖典の『ブッダチャリタ』（16-19）、『マハーヴァスツ』（vol.III, p. 80.）等に同類の記述が見られる。
- (2) 本文では kappam（劫）であるが、ブッダゴースの註（*ettha ca kappan ti āyukappam*）に従い、「寿命のある限り」と訳した。（*Sumaṅgalavirāsini* part II, p. 554.）
- (3) *Mahāparinibbāna-suttanta* 3-4・38～40・44・47. これに相応する漢訳では、『遊行経』（大正1, p. 17）と『大般涅槃経』（大正1, p. 193）のみであり、他の漢訳にはない。
- (4) *Mahāparinibbāna-suttanta* 3-50. 他に『大般涅槃経』（大正1, p. 192）に相応する記述がある。
- (5) 『スッタニパータ』の日本語訳は、宮坂宥勝：『ブッダの教え』（2002年 法蔵館）、『テラガーター』・『テラリーガーター』の日本語訳は、早島鏡正：『長老の詩』・『長老尼の詩』（世界古典文学全集 仏典I 昭41年 筑摩書房）をそれぞれ依用した。  
パーリ註釈に依れば、「慈」（*mettā*）とは、（1）『一切の衆生は安楽であれ』云々と言う意趣によって、〔人々に〕利益と安楽とを与えようと欲すること。（*Pj.* PTS II, vol. I, p. 128. *Sn.* 73偈の註）（2）「慈しむ」、「慈愛する」と言う意味である。あるいは「友人に対する態度」、あるいは「友人への行動」である。（3）慈は瞋恚多き者の〔清浄道なり』（*Vism.* p. 321）（4）〔他人に〕利

益をもたらす (*Vism.* p. 321)。(5) (i) [衆生を] 利益する行相を生起するを相とする。(ii) [衆生に] 利益をもたらす事を味 (=作用) とする。(iii) 瞋害の調伏を現起し、(iv) 衆生を愛すべき者と見る事を足所とする。(v) 瞋害の止息をこの [慈の] 成就とする。(vi) 愛執の生起を [慈の] 失壞とする (*Vism.* p. 318) と解している。『解脱道論』巻八「行門品五」(大正32 p. 435), *Vibhaṅga*, PTS. p. 277 参照。

「悲」(*karuṇā*) とは、(1) 『ああ、実に [人々が] この苦から解き放たれるように』云々と言う意趣によって、[人々の] 不利益と苦とを除こうと欲すること (*Pj.* II, vol. I, p. 128. *Sn.* 73偈の註)。(2) 他者に苦がある時、善人が [その他者に対し] 同情をする事である。あるいは悲とは、他者の苦を買い、殺し、滅せさせる事である。あるいは、不幸なる人々に対して [悲が] 撒き散らされ、遍満して扱げられる [と言う意味である] (*Vism.* p. 318)。(3) 害多き者の [清浄道なり] (*Vism.* p. 321)。(4) [他人の] 不利を除去する (*Vism.* p. 321)。(5) (i) [衆生の] 苦を除去する行相を生起する。(ii) 他者の苦に我慢せざるを味とする。(iii) 不害を現起し、(iv) 苦に打ち勝たれた者が無怙 (=孤独) なるを見る事を足所とする。(v) 悩害の止息をこの [悲の] 成就とする。(vi) 憂の生起を [悲の] 失壞とする の意味に解する (*Vism.* p. 318)。『解脱道論』巻八「行門品五」(大正32 p. 435), *Vibhaṅga*, PTS. p. 277 参照。

※因みに、*Vism.*, *Vibhaṅga* は「四梵住 (*cattāro brahmavihārā*)」として「四無量 *cattāro brahmavihārā*」の個々について解釈するが、茲では「喜」・「捨」については省略した。

- (6) *Pj.* II, vol. II, p. 486.
- (7) *Pj.* によれば、「無量の有情を満たし、慈心 (*mettacitta*) を修習し、広大にすること」であるとす。(II, vol. II, p. 417)
- (8) *Pj.* は、「あらゆる生き物にくこの無量の慈意 (*metta-mānasa*) を起こせ (*bhāvaye*, 修習せよ)、生ぜよ、増大させよ。そして無量の有情と言う対象に対してその [慈しみの意を起こせ]。』(vol. I, p. 248) と述べる。
- (9) *MN.* 8 *Sallekha-sutta* PTS. vol. 1, p. 167.
- (10) 人間の類は三つの災害 (飢饉, 非人, 疫病) に悩まされているが、その人間に「友であること (*mittabhāva*) ・利益する気持ち (*hitajjhāsayatā*) を起こせ。」・「慈 (*mettā*) を行うその人達にとり、慈は利益 (*hita*) ある。」・「[慈を] 受けた方の人々にとっても [慈は] 利益あると知るべきである。」(*Pj.* II, vol. I, p. 168f.)
- (11) *Pj.* によると、*mettā* は「[友人の] 利益を願うことにより、愛し、不利益

- が来ることから護る。」換言すれば、「友人としてのあり方」を表すと注す。  
(vol. I, p. 250)
- (12) *MN. 19 Dvedhāvītaka* PTS. vol. 1, p. 118.
- (13) *MN. 21 Kakacūpama-sutta* PTS. vol. 1, p. 127.
- (14) *SN. Nidāna-Kassapasamyutta* PTS. vol. 2, p. 199. ブッダがカッサバに対して、不浄説法・浄説法が何かを示す。
- (15) *AN. 5-17-167*, PTS. vol. 3. p. 196.
- (16) 「慈」の修習→「あらゆる生き者達は幸せであれ、安らかであれ、心幸せなものであれ」(*Pj. II*, vol. I, p. 244)
- (17) PTS. p. 394.
- (18) *anukampamāna* → 「有情を憐れんで、全ての智と法とを明らかにし、……あなたには師拳 (*ācariyaṃuṭṭhi*) はありません。」(*Pj. II*, vol. I, p. 368)
- (19) *uttama* → 「すぐれた (*visiṭṭha*)、もっとすぐれた (*pavara*)、あらゆる世間の利益や安楽をもたらす。」(*Pj. I*, p. 124)
- (20) *paramaṃ hitāya* → 「最高の利益である涅槃 (*nibbāna*) のために」(*Pj. I*, p. 192)

